

『爆笑症候群&爆睡症候群』の存在意義

～他人につくし、希望と信念を持つ～

順天堂大学医学部 病理・腫瘍学 教授
 順天堂大学国際教養学部 教授
 一般社団法人 がん哲学外来 理事長
 「明日を考える会 ～次世代の社会貢献～」
 会長 樋野興夫

2017年は、『爆笑症候群 & 爆睡症候群』を発見するに至った、記念すべき年となった。

『爆笑症候群』とは、「存在自体が周囲を明るくする人」であり、『爆睡症候群』とは、「楽観的に物事を考える人」と定義されよう。

筆者が専門とする「病理学」とは、病気の根幹を追求しようとする「the study of the diseased tissues」を機軸とする、「風貌を診て、心まで診る」学問分野でもある。「病気に対する正しい理解」を深めることを目的とするものであり、具体的に様々な病変の『正常細胞と異常細胞の違い』を学ぶことで、『病気』の具象的な

イメージを捉えることである。まさに「個性と多様性」の学びである。

病気の本態が遺伝子レベルで具体的に考えられるようになり、21世紀は、病理学にとってエキサイティングな時代の到来である。

ダイナミックな「広々とした病理学」は、時代の要請であると考えられる。患者の視点に立った医療が求められる現代、病理学の在り方を静思し、病理学の存在を高らかに世に示す時であろう。

「病理学」の使命：俯瞰的に病気の理を理解し「理念を持って現実に向かい、現実の中に理念」を問う人材の育成である。病理学は顕微鏡を覗きながら、大局観を持つことが求められる分野でもある

『爆笑症候群&爆睡症候群』の存在意義は、「他人につくし、希望と信念を持つ」症候群を、高らかに、世界にアピールすることであろう。

「『空っぽの器』という社会貢献」

stray sheep (OCC カフェ リピーター)

がん哲学外来カフェには、樋野先生のお話に繰り返り登場する「空っぽの器」としての性格があります。

- ① 「空っぽ」の場であること。
- ② 「器」のようにしっかりした場であること。
- ③ 集まるひとが自分の「空っぽ」の部分に何かを求めていること。
- ④ 自分の「空っぽ」の部分が満たされること。

カフェの不思議さを感じるのは④のところですが、集まるひとには何かしら「空っぽ」の部分があります。それを満たすものがカフェにあらかじめ用意されているわけではありません。それなのに、何かの出会いを

きっかけに、胸の隙間が埋まったり、こころが元気で満たされたり、人生の階段が上がったりします。

ことばには、聞く相手がいるからこそ立ち現れるという性質があるようです。

相手に伝えようとする中で、自分の中のモヤモヤが、時に明瞭になったり、何が不明瞭なのかかわかったりします。相手の変化や成長が、自分の側に変化を起こすこともあります。理屈で説明しきれない不思議な感覚ですが、この感覚こそカフェの魅力の源ではないでしょうか。

ひとりひとりがそれぞれの階段を進み続ける、そんな場を提供する「がん哲学外来カフェ」の活動は、これからの世代にも意義ある社会貢献です。

明日を
考える
ヒント

どんな時も、人生には意味がある。何か、あなたを待っている。誰かが、あなたを待っている。あなたの人生には、あなたが果たすべき使命(ミッション)が与えられている。たとえあなたが、今、どんなに塞ぎこんでいようとも、あなたが人生に絶望しても、人生があなたに絶望することは、決してありません。絶望の果てにこそ、光が差し込んでくるのです。(ピクトール・フランクル「夜と霧」より ～諸富祥彦・訳～)